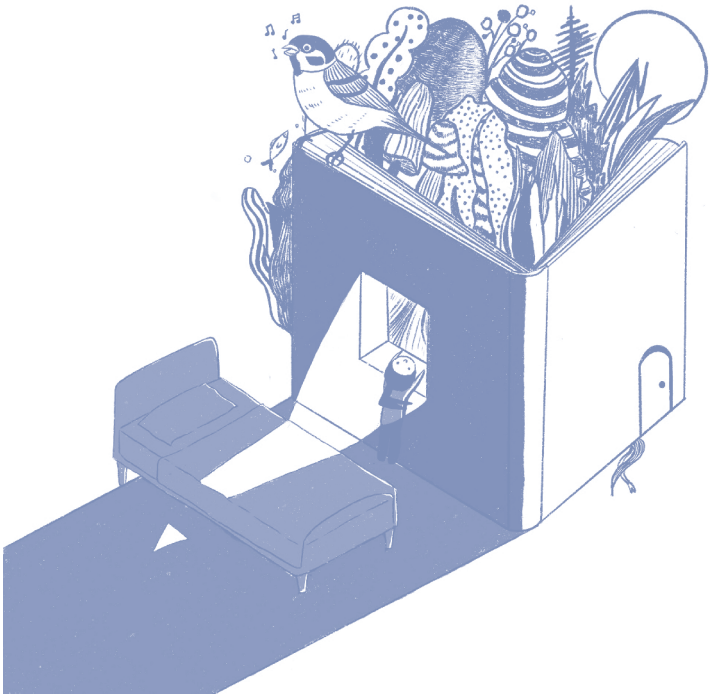
ISSN 0916-1368



Contents

・【巻頭エッセー】耽るということ…三木香代　●表紙

・【Parlando Interview】　音楽は食なり
井上恵理先生　きき手・箕輪紗弥可　●2 ～ 5

・風景の中で⑩…図書館長 井上郷子
資料の部屋⑩…澁井響子　●6

・【私のおすすめ】…櫻澤人陸 ／ 三浦友徳　●7

・Information　●8

Parlando

ぱるらんど「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.312

【巻頭エッセー】耽るということ

三木 香代

こちらの図書館には、ゲートなど全く設置されていなかった頃からお世話になっている。リニューアル前にあった、雑誌が閲覧できる小部屋は、授業の空き時間に立ち寄れる格好の場所で、人目につかず、静かでゆっくりした時間を過ごせていた。

実のところ、楽譜や音源を探し出して借りるのは今でも少し気が重い。閉架式は緊張を伴う。まず検索が下手である。検索語や条件設定がまずいと目当てのものが出てこないのは当然なのだが、上手く探し当てたとしても検索の過程では思いもしなかった状態で出てくることもある。崩壊寸前の楽譜がファイルで保護されていたり、ものすごく年季の入った変色したスコアだったり、CDの外箱が想定外の大きさだったりして、受け取りカウンターで密かに動揺する。

その点、開架式は気が楽だ。本がそこに並んでいるから。

本がいっぱい並んでいると心が躍る。それは子どもの時からそうである。住んでいた家の二軒隣が本屋さんだったことが関係しているかもしれない。それは地方の小さな城下町の中では一番大きな、地域の学校の教科書も一手に扱うような老舗の本屋さんで、見上げると吹き抜けで二階には回廊があり、天窓から明るい光が差し込む非常に珍しい造りとなっていた。壁面にしつらえられた棚の、手の届かないようなところにまで本がぎっしり並んでおり、大きな振り子時計や、番台風の会計処も思い出される。当時は知らなかったが、三木露風が高校生の時よく通った本屋だという。そういえば、私が通った小学校の校歌は山田耕筰と三木露風によるものであった。

そのような環境のお陰もあって本を手に入れやすかったのだろう。母親が、家の中に図書室のようなスペースを作ってくれていた。子どもの頃住んでいたのは本家が営む醤油蔵と連なった町家で、同じ敷地の奥には桶屋さんが醤油樽を手入れする場所があり、職人さんが樽を回しながら叩くリズミカルな音が間近に聞こえていたのも、同時に思い出される。

その頃は好きな本を何度も何度も好きなだけ読むのが嬉しかった。一度読み出すとやめられず、そのうち陽が落ちて部屋がどんどん暗くなっているのに気づき、我に返るということもしばしばだった。

今は、時間を忘れて、というわけにはいかないけれど、時にピンとくる本があれば嵌(は)まってしまう。最近は、その昔私の「読み聞かせ」のよき聞き手だった息子が、思わぬ興味深い本を紹介してくれるのが楽しみである。

読み耽(ふけ)っていると、想像と思索の世界が拡がっていく。立ち現れる心象風景は自己を投影したものとなり、自己の内面を、心の奥底をみつめることにもなる。

一瞬にして別世界に連れ去られ、そこに浸ることができるのは幸せだ。想像も思索も無限で自由、何を感じようと自分だけの世界である。意味のある言葉を読んでいながら、情景や心理描写を超えた、言葉にできない感情や空気が拡がり、心が揺さぶられることがある。それは音楽を聴いたときや演奏をするときと同じ感覚だ。そのような体験ができることこそが、人間らしく生きることなのだと思う。

●みき　かよ　本学教授（ピアノ）